郷土の遺産

伊達伍著作集

郷土讃岐の遺産

伊達伍

1　国庁跡

ペテイオニーデの城山…せせらぎの綾川…それにふちどられた緑の丘と段丘状に耕された畑、そこに府中本村のたたずまいがある。

現在、鉄道と広い国道に沿いながらも、どこかに牧歌的ないなかの素朴さを感じさせる風情である。しかし山河襟帯の地というが、ここは王朝のその昔、讃岐一国の国府が置かれていた。

崇徳院の行宮跡・鼓ケ丘・その緑の丘を今の国道との間には「内間」「垣の内」などと古くから呼ばれた地名があって、国府庁はおそらく、この界わいだろうと推定されていた。

大正十一年、時の村長、藤井亀三郎氏が首唱となつてその「垣の内」に建てたのが、今の讃岐国庁跡碑である。塚のように築いた敷地は二、三十坪もあろう、鼓ケ丘の吉川さん所有の田の中に立っている。

なにぶん、以前からこのあたりに風変りな小地名が残っていたのであやしかった。「垣の内」はもちろん、「正倉」「印やく」「聖堂」「按台」「帳継」「状継」などというのがそれで、これらは確かに国府のあった土地柄を暗示していた。数ある全国の国府跡の内この讃岐の府中ほど関連性の地名をたくさん残しているのはまれなのだ。

そのうえ、あたりに散乱した古瓦の出土品も多い。これがまた証拠立てになった。不思議なことに浄土真宗の盛んな土地柄ながら、今までに寺は一か寺なかった府中である。

それに「本坊」とか「南坊」という地名「西福寺」「弘法寺」「開法寺」など、はっきりした寺名も残って、王朝の昔国府跡らしく仏教文化の栄えたことをしの

ばせている。

しかし、これらは既に中世期に廃寺となったらしく、その跡はみな里のため池にかわってしまっている。

菅原道真が、「暁にきく開法寺の鐘…」と漢詩に詠じた開法寺…それが今の開法寺池になって、いたずらに鼓ケ丘の緑をうつすばかりだ。

「府中」は讃岐に限らず、類例の多い国庁跡の地名である。そして、同時に、当時は駅路の中心でもあった。

綾川をはさんだ新宮寄りに「石井」という地がある。そこに「堺石」「京の石」「国分石」と呼ばれた古い碑石がたっていて、その昔この石碑が讃岐の中央点を標示していたというのだ。

府中の「石井」を中心に道路は当時西の方、額坂越しに柞田駅（観音寺）…東は刈田駅（引田）へ通じていた。ここはその古い駅馬の遺跡跡でもある。この駅を「河内駅」あるいは「甲知駅」といって府中の別名にもなっていた。

国府の地を「コウチ」と呼ぶのは他国の例にもあるから、おそらく「国府地」の意味からの呼称であろう。

2　万葉の島沙弥

瀬居島と沙弥島は、どちらも、もとは無人島で、瀬居島は本島の移民で開かれたが、沙弥島は与島の人が開いた島である。島の開発は少しばかり沙弥島が古くて正保元年、与島の岡崎次郎左衛門が自分の息子、庄兵衛を分家さすために開いたのが、そもそもこの沙弥に人がすみついたはじまりで、今から三百七十年ほど前の話である。

なにぶん回りが二キロメートル足らず、島の南北で九百メートル、東西の幅の広い所で百六十メートルという狭い島だから、いささか、隣の瀬居島より早く開けながら人口は増加しなかった。幕末に近い文政年間に、ようやく民家は八軒となり明治になって十七軒と部落の成長も瀬居島とはよほど格差ができてきたものだ。

ところが、長く無人島のまま放置されていたとはいえ、それはただ定住に不適というだけで、古くから人間の生活圏であつたことはもちろんである。島の中田

浜という砂浜からは、先史時代の石器や縄文式土器の破片すら発見されるのだ。それに千人塚と呼ばれる古墳があるのもこの島としては珍しい。

しかもこの塚のことであろう。万葉の歌人柿本人麿が、歌に詠じているのは…。旅の空であったろう。当時、人麿は、今の丸亀の中津から船に乗って東に向かった。その時風波も荒くどこかへ避難しようとして、船を着けたのが、この沙弥島であった。

その時のことが、万葉集巻二に載っている。

讃岐の国狭岑島に石中の死人を視て作れる歌一首ならびに短歌…というのがそれだ。

多くの歌がある中で万葉に載った讃岐の歌というのは、この沙弥島を詠じたもの以外にない。だから、いわば沙弥島は讃岐における万葉の島といえるのだ。

「玉藻よし讃岐の国は国柄か、見れども飽かぬ神柄か…あちこちの島は多けれど、名ぐはし狭岑の島…」

という書き出しの長歌で、塚に寝る死人の霊を弔う歌である。その中で、人麿は、こんなところに葬られた人はいったいどこの人だろう。その人にも妻や家族があったろう。妻もあればさぞかし弔問もしたかったであろう…などという気持を歌ったのだ。

その長歌のつぎに反歌がよまれている。

・妻もあればつみてたげまし佐美の山野の上のうはぎ過ぎにけらずや

・奥つ波来よる荒磯を敷妙の枕とまきて寝せる君かも

いまこの荒磯の自然石に、柿本人麿碑と刻んだ記念碑が立っている。

つまり、このあたりが海波の難を避けた人麿の、かり小屋をしつらえたところだろうと考えられている。

夕さればさみねの島になく千鳥荒磯道に汐やひくらむ

夫木和歌集

3　三十六塚

南北朝の昔、讃岐の国は幕府方の重臣細川頼之の勢力が強くて、南朝方（吉野朝廷）の形勢は次第に不利になっていた。

その時、自ら進んで讃岐の国に乗り込み、朝廷に願い出て、頼之を追討し、南朝の勢力をばん回させようとした勇将が現れた。

それがほかでもない細川清氏・同じ細川の一味ながら南朝方に味方する当時天下無双の剛力を誇った武将であった。

清氏は讃岐に下るとすぐ白峯に閉じこもったので、さすがの細川頼之もろうばいした。

そのころ、頼之は海をこえて中国筋に遠征していたからである。

頼之は急いで帰国するとすぐ宇多津に陣地を築いて、白峯の清氏の陣営に対抗した。そしてやがて起こるのが白峯合戦と呼ばれる戦いなのだが…、これがいわ

ば讃岐における南北両朝の決戦であった。貞治元年（一三六二）の夏、白峯の入口、雄山（おんやま）の麓では凄惨な決戦が展開された。その戦跡地・それが今に残る林田の三十六塚である。

この合戦にさすがの勇将清氏も頼之の策謀にまんまとひっかかったから耐えられなかった。清氏は手兵わずかに三十六騎、攻め寄せる敵は一千に余る大軍、今はこれまでと清氏、甲ちゅうの緒を結ぶまもなく群がる敵中に突き入り敵の先陣、乃木備前次郎（後世の乃木大将の祖先）を始め数名の武士を、くらの前輪に引き寄せ、一刀のもとに突き殺し、群がる敵兵のひとりひとりを両腕に抱き上げては投げ飛ばす。あざやかな手並みを現わしたがいかんともしがたい。従う三十六人の従士とともに雄山の麓の湿田でとうとう最後を遂げたのである。

夏ともなれば雄山の繁み、その木陰に鳴くせみしぐれ、ただそれだけが物寂しく往時を語ったが六百年のその昔、つわものどもの夢の跡は、だれあって、訪れる者もなかった。

しかしいつだれの手になったのか野辺に立つ小さい石仏、それにあたりから掘り出されるさびはてた刀剣、それが戦陣の名ごりを物語っていたので、文政のころ讃岐の学者中山城山が、この地を尋ねこの石仏こそ南朝の忠臣細川清氏の戦没地と断定し、そこに石碑を立てたのがそもそもこの地の世に知られた始めである。

雄山の西、片山部落の南、白峯街道の北側、その田の中に一見それとわかる松樹の社地。それが清氏以下三十六人の霊を祭る三十六塚なのである。

4　やそばの清水

さみだれの空にまかせてこのごろはせきこそやらぬ野沢井の水が、古くは
朝ぼらけ野沢の霧の絶え間より立つ白鷺の声の寒けき

今では、もっぱら、「やそばの清水」と呼びならわされているが、古くは「野沢の井」と言って、よく古歌にもよまれている。

「弥蘇場」「八十蘇場」あるいは「八十八」と書いて「やそば」と読ませるのは「讃留霊王記」という伝説書、それから出ている。

南海に住む悪魚・それを征伐に出かけた讃留霊王の水夫たちが、その毒気にふれてばたばたたおれる。そこへ天童が現われ「やそばの霊水」を注ぐ。すると不思議に、八十八人の水夫たちが、たちまち息吹き返して蘇生したという。その話からきた地名で、附会の説である。しかし、ともかく古くから当国一の霊泉と名のつく所には薬師如来がつきものだが、このやそばの場合はよほど離れたとこ

ろにまつっている。

清水の右手、金山の山腹に小さいため池がある。その水中にある石仏がその薬師如来でこの石の下から地下をくぐってふもとの「やそば」にわき出る。それでこの水には霊験があると昔から信ぜられてきた。

今も、わざわざ遠方から一びんの水をくみに来るという。病人に飲ませたり、「まつごの水」にするらしい。

清水のすぐ東は崇徳天皇の社がある。天皇は長寛二年八月二十六日府中の鼓岡でなくなられた。

「一刻も早く…」と都へ注進はしたが、何分残暑の折りであった。都のごさたも待たねばならぬし、何かと、それまではご安泰な処置が望ましい。それでとりあえず、ご霊きゅうを霊泉のある「やそば」にうつし、その水中に安置したと史書に伝えられている。

そのゆかりで、今もここに天皇の社がまつられているのである。

その後、ご霊きゅうは白峯にうつされたのはもちろんであるが、「やそばの清水」…それは、いわば天皇の霊水でもある。

現在この霊水を引く農家は十二・三軒、田にして二町四反ばかりである。

“崇徳天皇のやそばの水は、澄まず濁らず出ずまさず…”

今の里人は、こう歌っているがこの霊水・それは今後も長くやそばの里をうるおすことであろう。

5　金堀り場の遺跡

聖通寺山の北端、海に面した北浦の部落、その山鼻のがけ下に、戦時中の防空壕をおもわすような深い洞窟がある。

この洞窟は海波の侵食による自然のものではない。だれが見ても明らかにさく岩のあとのある人工の坑道で、坑口から奥へは、およそ十四・五メートルはあろうか。物すごく硬いペクマタイト（鬼みかげ）の岩盤を故意に打ち抜いて奥につづいている。内部は暗いが、勇気を鼓してはいって見ると、足もとはいささか心もとないが、大の男が二人立ち並んで歩行出来るだけの広さである。

ところで、北浦の人々は古くからこの穴を金掘り場と呼んでいる。それはこの坑道が古い鉱石採掘の遺跡であることを物語っているからである。

実は今から三百十数年前、初代高松藩主松平頼重公（水戸光圀の兄）の時である。この聖通寺山に銀鉱のあることを発見して掘らせたのが、今に残っている北浦の

坑道で、藩に残された頼重公の「英公実録」を見ると、この坑道が掘られたのは承応三年（一六五四）であるとあり、「この年銀を山に掘る。…日月は不詳なれども、銀山は石田（大川郡）及び宇多津にあり…」と記述されている。この宇多津は聖通寺山の金掘り場をさしていることも自から明らかであろう。

してみると、聖通寺山は、高松藩が少なくとも銀の出る山として、その採掘に力を入れたこともわかるであろう。

しかし、今に残る坑道の遺構から見ると、その期待も思わしくなく、間もなく廃坑にした形跡は十分に読みとれるのである。

いずれにしても、江戸時代の初期、聖通寺山が銀山として騒がれたことは確かで、そしてその遺跡がほかでもないこの北浦の金掘り場なのだが、土地の古老もその古い伝承は既に忘却している。

「そうですなァ、古くから金掘りの場のあったことは聞いているが、お殿様時代の話は存じません。黒い羽織をいつも着込んだ坂出の人、それがこの金掘り場

にやってきて、よく指図していたのを覚えている。何でも、焼くと青い火の出る蛍石というものをここで掘り出し、それを船に積んで回漕していたのは子供心に記憶がある。もう五十年も前になりますかなァ・その後、戦時中でしたか宇多津の某氏が、やたらにこの山には金があるんだ銀がでるのだと言って、山中を探索していたこともあります…」などと、近々の見聞を物語ってくれるだけであった。

ちなみにこの坑道の上、今のセンターの北西にあたるところにも坑道がうがたれている。これも金掘り場の遺跡である。

6　西庄のまな板石

「それコロだ。」　「綱をかけろ。」　コロと言うのは丸太の材木、それを石の下に敷いて綱でひっぱる。村の若者たちが、大勢でとりかかるが、なにぶん巨岩のこと容易には動かなかった。

いまからもう五十年も前のことになる。

大正五年、村人たちが、城山長者の庭石だと言うので、城山の頂上から、険しい山路を一尺きざみに、一か月もかかって運んできたのが西庄のまな板石である。

今はそのあたりが果樹園になっているがその畑の中に白ぼくれて風化した輝石安山岩の巨大なまな板石、それがいかにもじゃまになるかのように、ぽつんと横たわっている。そばにはご苦労した村人たちの名を刻んだ「ミカゲ石」の記念碑が立っている。なにしろその頃、数奇を好む金満家たちには、珍しい庭石などになるとずいぶん高価に売れた時代であった。それをあてこんだわけでもあるまいが、

土地の人の話では、「万一、商売にならなくても、ここまでおろしておけば結構見せ物になる。それに、この岩を中心に、このあたりを公園にでもしよう。」そんな気持ちでもあったらしい。

ところが、労破りの宴を開いて一ぱいきげんになったのはよかったが、どうしたことか、その翌日、その中のひとりが急に死んでしまった。「さあ大変。」格言の厚い里人の間に「城山長者のたたりだ。」というものも出てきたと言うのがこのまな板石にからまる伝説であるが、そのたたりをおそれてか、周囲が耕されてもこの石だけは動かされていない。

美しい眺めの城山の山頂、白球を追う緑の芝生、心なしか、遊閑人のゴルフ場となってしまったが、そこは古代の城のあとで、今も石塁の跡や城門の礎石が残っている。土地の人は、城山長者の屋敷あとだと信じているが、実は、わが国でも珍しい古代朝鮮式山城の遺構であって、「城山長者の庭石だ。」と言って西庄へおろしたまな板石、それは城山の城門跡にあった礎石の一部である。

地面に埋められているときには、ちょうどまな板のように見えるのでまな板石と呼ばれたが、川津からの登り道、山頂に近いところにこれと同様のまな板石が二つほど残っている。

さて、このまな板石は、自然石に加工したもので、平らかな表面は二重につくられている。長さは約二・四メートル。幅の広いところは、八〇センチ、厚さは六・四センチばかりもある一枚の巨岩である。その根っこに、今では「史跡地」と書いたいしくいが立っている。

7　黒岩の天神

川津の黒岩天神さんは、なにぶんこのあたりに名のしれた社である。境内にもうでると、奉納されたおびただしい筆、鉛筆などが目にとまる。学問の神として天神さんが子どもたちに親しまれるようになったのは、寺子屋時代からで、庶民の子どもたちにも読み書きが始まるようになってからのことである。

道真公の霊がおそろしい雷鳴となって藤原時平を悩ましたとか、また讃岐の国では城山に雨を祈って、干ばつに苦しむ農民を救った故事や、今に残る滝宮の雨ごい念仏踊りのように、讃岐の天神の社は夕立や雷を雨ごいの神として勧請したものが多いのだ。坂出では天保年間どうしたことか激しい雷鳴と豪雨が多くて塩田の被害はもちろん、雷にうたれて命をおとす人も出る始末だった。それで雷よけ、夕立よけに菅公さんを勧請したのが、いまある新開の天神さんだ。してみると、そこには雨をきらう塩田の町坂出の性格が出ているように思われてならない。

ところで黒岩の天神さんの場合は、その反対だ。むかし川津村には、広い所領を持っていた山口弥右衛門政安という郷士が住んでいた。

時は元禄五年（一六九二）の夏のことだ。ひどい干ばつが続いた。なんとか雨を降らせたい。弥右衛門は、百姓たちが天を仰いで嘆息する姿を見てたまりかね、たまたま自宅に菅公自筆の書状があるのを思いだし、弥右衛門はそれを取り出し、東川津の折居部落の山麓、そこにある黒岩の上に安置し川津八幡神社官（福家和泉）を招いて祈願をこめたのである。ところがそれから間もなく大雨が降ったから村人たちは大よろこび、さっそくその岩の横に祠を造営して祭ったのがそもそも黒岩天神の始まりで元禄五年の八月二十五日のことであった。今から二百七十三年前の話である。村人たちはそれ以来日照りが続くと、この社に集まって雨ごいをするようになったので、誰いうとなく「雨天神」とまでいわれたのがこの黒岩の天神さんだ。それがいつの間にか一月、二月、三月、と入学期を控えるころになると、坂出はもちろんのこと、遠く丸亀、多度津方面からも雨ごいならぬ参拝客

がどっとふえてくるようになった。世相の推移がうかがえられるではないか。

さて、このお社の山をすこし登ると、満千石という洞窟になった大岩がある。中には日照りにも枯れない清水がたたえられているが、不思議に海の潮が満つときには、この岩膚がぬれると言い伝えられている。天神のある黒岩は地質学的にいえば、火山噴出物が火山灰で凝固したいわゆる凝灰岩で、ぼろぼろにはげやすい性質をもっていて、ときにその中から八角形の結晶をもったざくろ石…金剛砂が発見されることがある。風化した境内の土の中から、たまたまそれが拾えるので土地の人はそれを珍重がって「八角石」だと呼んでいる。しかしそれも今は少なくなって容易には見当らない。

『教育香川』一九七〇年一二月号～一九七一年六月号に連載